

江南佛蹟行記 (下)

三 桐 慈 海
大 内 文 雄

六月九日。晴、但し薄雲が多い。午前八時過ぎには宿舎の西冷賓館を出発し、杭州での一日が始った。この日午前中は、靈隱寺・飛來峰・黃龍洞・岳王廟等をまわった。靈隱寺は東晉成帝の咸和年間(三二六—三三四)に創建されたと伝えられる杭州随一の名刹である。大雄宝殿の本尊など、これまでに見て来た

どの寺院のものよりも巨大であった。建物も佛像も他の例に洩れず新しいものである中で、僅かに天王殿前の経幢と大雄宝殿前の経塔とが北宋初期の遺物として注目される。今は靈隱寺近くの飛來峰と共に、觀光地として有名なようで、中国の人々で引きもきらぬ有様だった。それまで山間部や田園地帯をへめぐって来た目には、何ともほこりっぽい景色に映る。けれども寺の裏手にまで行くと、一段高い所に律堂の跡があり、草叢にかくれるように礎石が整然と並んでいるなどして、静かなことと相俟って、かえって心ひかれる思いがした。飛來峰には、五代より宋元時代に至るまでに次第に形成された一大磨崖佛像群が

ある。時間に追われていたこともあって、我々が見ることのできたのは、僅かに靈隱寺山門前の溪流に沿った最も見やすいものに限られた。中国の人々は皆思い思いのポーズをとって写真に取まっている。石像の中には部分的に黒光りしているものもあるが、これはどうも人気があるために常日頃さわられているためらしい。黃龍洞は、もとは道観だった建物と奇岩を配した庭園とで成るが、今は休憩所となっている。我々もまた御茶をいただいて小休止を取り、それから兵王廟へと向った。南宋の忠臣岳飛を祭ったこの廟は、文革期に破壊されたものの、その後、美事に修復され、今も非常な賑いを見せている。金国を相手に奮戦した岳飛は、今も英雄として人気があるということなのであろう。大きな岳飛の像もいかにも現代中国風の容貌・姿勢をしている。廟裏手にある建物は、この時も修理工事中だった。

酒 この日午後は、西湖遊覧が予定されていたが、それまでに少々の自由時間がとれたので、西湖の中の孤山にある西冷印社を訪れた。西冷印社は、近代中国の篆刻家・書画家として著名な呉昌碩によって清・光緒三〇年(一九〇四)に設立された。当時有数の学者・文人がこの結成に参集したという。印社裏手の山は石段などによって散歩道がしつらえられており、樹の間越しに望む西湖もなかなか佳い景色であった。そうこうしている内に遊覧に出かける刻限となり、慌てて集合場所にもどってみると、もう出発寸前、大汗をかきながらの西湖遊覧となった。薄曇りの陽光の下、南屏山・玉岡山が連り、樹海に浮くように

浄慈寺の薨が望まれる。遠くには保俶塔が聳え立っていた。浄慈寺は、『宗鏡録』の著者として佛教史上に名高い永明延寿が永らく止住していた所である。一〇世紀の呉越国時代の創建というが、現在の伽藍は近年のものであるらしい。残念なことに今はまだ公開されておらず、湖上より遠望するほかなかった。上々の気分で遊覧を終えた後、再びバスに乗りこみ、銭塘江のほとりに建つ六和塔に向った。高さ約七〇メートルのこの塔は、その佛教に因む塔名とは別に、灯台の役割をも果していたという。もう既に夕刻に近い頃であったが、塔上から眺めた、ゆつたりと大きく彎曲する銭塘江の景観は、そこに架かる鉄橋、時折通る汽車と共に、一幅の絵かとも思われる程に素晴らしいものであった。

六月一〇日。雨。この日は移動に費された。五時半に起床、杭州駅八時発の列車で上海を経由し、午後四時一五分に南京駅に到着した。所要時間は約八時間。南京に入る少し手前に「栖霞」の名の見える駅があり、それを過ぎるとすぐトンネルに入った。南京は涼しい。この夏の暑さは凄まじいと聞いていただけに拍子抜けの感がある。南京での通訳兼案内役の王氏も、異常な涼しさです、と言う。宿舎は双門楼賓館。遠くに南京の城壁が黒々と連って見える。夕食後、「金孔雀」という歌劇を見る。南京と名古屋との姉妹都市締結を記念したものとのこと。日中友好を象徴する内容のものだったが、ソデで歌う私服の合唱隊の方に興味を持った。皆若く、いずれも豊かな声量を持っている。

六月一日。曇天。南京は、私の興味から言えば、何と言っても南朝佛教の根拠地としてである。当時建康と呼ばれたこの都には、城内、城外を問わず幾多の寺院が建立され、その極盛は梁の武帝の時代に現出された。今、中山陵のある紫金山、即ち当時の鍾山、その麓にある独龍阜、また鷓鴣山・清凉山、皆佛教史上に名高い。そして今も流れる秦淮河は戦略上、経済上、最重要の運河であった。

明の故宮趾に立ち寄った後、中山陵に着く。参詣者は流石に多く、皆、三九二段の広い石段を登って行く。我々は時間に迫られ大急ぎに登り下りしたが、中国の人々は実にゆつくりと、楽しみながら歩いている。靈谷寺に向う。その塔上から見た紫金山は緑色に輝き、緩いスロープを見せながら長々と南京市街に伸びていた。中山陵の左手に頭を覗かせている独龍阜には、梁の三大法師の一人として著名な開善寺智蔵や、武帝より智者の号を賜わり国師として崇敬された草堂寺慧約等が葬られた（統高僧伝巻五・卷六）。鍾山には智蔵の居た開善寺があり、今の明・孝陵の地がそれであると言われているが、他に著名な寺として定林寺があった。六朝期文学評論の白眉として名高い『文心雕龍』の著者劉勰は、若い時、定林寺において僧祐に師事し（梁書劉勰伝）、僧祐が歿後定林寺に葬られた時は、彼が碑文を製っている。またこの他にも、山頂南面には武帝ゆかりの大愛敬寺の旧址があると伝えられている。

靈谷寺を見学した後、鷓鴣山に行ったが、寺趾と受け取れるものは何もない。ただ地名としての鷓鴣寺が残っているのみ

である。道路をはさんで鶏鳴山と向い合う建物は、旧国子監の建物で、今は南京市革命委員会とのことであつた。玄武湖より梁・台城趾を望み、賓館で昼食の後、清涼山に向う。かなり老朽した小さな門をくぐると、右手に天王殿、その奥に大雄宝殿がある。修理中の様子だったが、帰りに辿つた石段には、一九六五年一〇月の銘のある「清涼山寺」と刻んだ石が敷かれてあつたりして、破壊の跡を見る思いがした。この後夫子廟址に立ち寄つた後、長干橋を通り秦淮河を渡つて、雨花台に向つた。

雨花台は、現在、革命に殉じた人々を記念する公園となつてゐる。中山陵と共に、景勝地であることもあつて、南京を訪れる人々の観光コースの中には大底組み込まれているようであるが、その名の由来となると、これが『統高僧伝』巻五に立伝されている光宅寺法雲伝に求められている。

嘗て一寺において此の経を講散す。忽かに天華を感じ、状、飛雪の如し。空に満ちて下り、堂内に延ぶ。空に昇りて墜ちず、講を訖りて方めて去る。

とあるもので、一寺とは雨花台にあつた高座寺とされ、此の経とは法華経を指す。

土南京での一日の半分は、こうして目まぐるしい程の駆け足見学で終つてしまつた。

午後二時一〇分、雨花台下を出発し、拱山棲霞寺へと向う。途中、左手畑の中に明の徐達・李文忠の墓などが見え、一時間足らずで棲霞寺前に到着した。

棲霞寺は修復されたばかりで、まだ一般には公開されておら

ず、我々も寺の左手にある通用門から中に入れられた。その小門には、一九八〇年四月一日付の「通告」が貼りつけてあり、見ると、四人組の横行した時期に重なる破壊をうけた、とある。今は伽藍が整然と並び、臺の飾りが美しい。四時半までの参観を許可された。

山門左手にある小亭に「明徴君之碑」が保存されている。唐の高宗の御製である。是非見たかつたが、管理責任者が不在といふことで叶わず、金網越しに窺うだけであつた。

明徴君、即ち南齊の処士明僧紹は、『南齊書』巻五四・高逸伝や『南史』巻五〇に立伝されている。拱山に隱棲する明僧紹に師友の敬を以て遇せられたのが、棲霞寺開山第一世の法度である。『梁高僧伝』巻八の彼の伝を見ると、

（法）度、常に安養に生れんことを願う。故に偏えに無量壽經を講じ、積むに遍もて教うるあり。

と記されている。この法度のもとに遼東の僧朗が訪れ、江南における三論研究は、彼によつて先鞭をつけられた。僧朗より僧詮と次第し、僧詮の門下に法朗・慧布・慧弁・慧勇の四友が輩出し、法朗の下に吉蔵が出るに至つて、三論宗の大成を見る訳である。僧詮下の四友の中、慧布のみが終世拱山に止り、棲霞寺を建立することになる。この慧布の在俗の法友に、陳の江總がいる。梁から陳、そして隋と六朝末の乱世を生き抜き、また文学史上においても注目される人物である。『陳書』巻二七の彼の伝に、

弱歳より心を釈教に帰し、年二十余にして鍾山に入り、靈隱

寺の則法師に就きて菩薩戒を受く。暮齒、陳に官^{つか}う。撰山の
布上人と遊歎し、深く苦空を悟る云、

と見え、非常な篤信家であつたことが分る。『広弘明集』巻二
〇によれば、彼は陳末の大建一四年(五八二)、翌至徳元年、同
三年、そして慧布の歿年である禎明元年(五八七)と頻繁に撰山
に足を運び、またそこに逗留しては詩を詠じている。慧布の歿
後は、彼のために涅槃懺を営むなど、両者の交際の親密であつ
たことが知られる。このような江總には、また「撰山棲霞寺碑」
〔撰山志卷四・全隋文卷一一所収〕なる一文があり、この一級資料
によって、寺の来歴が明瞭となつてゐる。

大雄宝殿内には、奥まつた左右の隅に、六朝佛・貞観佛と説
明された二体の坐像がある。いずれも明代のものという金箔を
施した木製の厨子に安置されている。しかし、右の六朝佛は頭
部のみが当時のものに過ぎず、下半は全て近時復元されたもの、
また左の貞観佛は、頭部が近時復元されたもので、それ以下の
身体部と台坐とが当時のものである。いずれも破壊の厄に遭つ
たとの説明を受けた。佛坐像の背後の厨子の壁面には、来迎図
らしきものが線描されていたが、判然としない。

祖堂は修理中だつた。入ってみると、「西天東土歴代祖師之
蓮位」と中央に記された奇妙な内容の板が置いてある。見ると、
まだ作製中らしく、何本もの罫の中に一四代までが記入されて
いる。『臨濟正宗栖霞堂上開山第一代上法下度禪師』などと書
かれてゐる。第二代は天台智顛、第三代は法響とあり、前述し
た僧朗・僧詮などの名はない。臨濟正宗の他、天台教宗・三論

教宗・終南律宗等の肩書きがあり、歴代と言うからには一代一
人が普通と思われるのに、この「歴代祖師之蓮位」では、例え
ば四代が二人、一二代が二人おり、一三代に至つては五人もい
る。寺側の人はおらず、これについての説明を聞くことなく終
つたのが残念だつた。

棲霞寺右手より緩い坂道を登つて行くと、千佛巖に着く。巖
山の各所に佛龕が鑿たれ、様々の佛・菩薩・将神等の像が彫ら
れてゐる。中でも三聖殿(という呼称らしい)が最も大きく、
入ると、窟内の狭小に比べ、中の無量寿佛像が異様に大きい。
これは南斉武帝の永明七年(四八九)の後、明僧紹の第二子・明
元琳が、父の遺志を繼いで法度と共に鑄造したものである(江
總「撰山棲霞寺碑」)。ただ残念なことに、三聖殿を初めとして、
この石佛は完好な姿を保つものが皆無に近く、大方は腕が取
れ、鼻が欠けるなどしており、その上、後世の補修と落書によ
つて一層無惨なものとなつてゐる。それでも、江南の地におい
て、南朝に起源が求められ、且つこれだけの規模を持つ石佛群
は珍しく、貴重な例に属する。

千佛巖の左方には、荘麗な舍利塔がある。この創建が隋・文
帝の仁寿元年(六〇一)の詔によるものであることは、隋・王劭
の『舍利感應記』〔広弘明集卷一七所収〕によつて知ることができ
る。即ち、仁寿元年一〇月一五日正午を期して、一勢に舍利を
奉納せしめた三〇州の塔の一つである。但し、現在の塔は、五代
南唐時代の再興であらうとされている(中国文化史蹟解説卷一〇)。
塔の下部には釈迦八相図が浮彫りされている。美事なものであ

るが、周囲に鉄柵が施してあり、近寄って見る事ができない。棲霞寺を辞し、南京へ戻る途中、梁墓四ヶ所に立ち寄った。

まず最も良く整っている安成康王蕭秀の墓に着く。これは甘家巷小学校の中にあり、中央の通路(本来は墓道であったもの)をはさんで一段低くなっている場所に、手前から石獸・石碑・石闕・石碑が左右対になって並んでいる。碑は完全に磨滅しているが、上部中央に円孔があげられており、漢碑の伝統を継ぐものと言う。一九七六年一月に立てられた南京市革命委員会の「蕭秀墓石刻」という標識には、「時代」として梁普通四年(五二三)と記されている。これは蕭秀の歿年である。小学校を後にして間もなく、道路の右手、一面の麦畑の中に二体の石獸が見えて来た。頭をもたげ足をふんばり、口をカッと開けて向きあっている。量感に溢れた実に美事なものである。蕭秀墓のものと同様である。向うにはもう一体石獸があり、建物の中に保存されている石碑も見える。都陽忠烈王蕭恢・始興忠武王蕭檐の墓址である。蕭恢は普通七年(五二六)、蕭檐は普通三年(五二二)に歿している。周囲一面麦畑である上、刈り入れの最中でもあるが、蕭檐墓の石碑には、とても近づくことができなかった。四番目に現れた梁墓は、南京への復路左側の、畦道をはさんだ両側に立つ石獸と石闕である。この石闕は「梁故侍中中撫將軍開府儀同三司吳平忠侯蕭公之神道」と反刻で刻まれた文字が判然と読み取れる。これは普通四年(五二三)に歿した蕭景の墓址である。その他、臨川靖惠王蕭宏の墓もある筈なので、場所を通訳の王氏に尋ねると、ここからは離れた場所にあるので、そ

こにまで行く時間がない、という返事である。残念だが諦めるより仕様がなかった。これ等四つの梁墓の主の中、蕭景が武帝の従父帝で、彼を除く他の秀・恢・檐の三名は、いずれも武帝の異母弟である。『梁書』卷二二・太祖五王の論などには、藩屏としての彼等が、よく武帝の国家統治の業を補佐し得たことを称揚している。また臨川王蕭宏は、棲霞寺と密接な関係を有した人物であったようである。陳・江總の『撰山棲霞寺碑』には、天監十年八月を以て、爰に帑藏を撤ぎ、復た葺飾を加う。と記されている。

午後五時四五分、宿舎に戻る。七時の夕食までは自由行動をとれることになったので、一行五名でマイクロバスを借り、石頭城址に向った。城址は赤茶けた礫混じりの城壁である。殆どの部分は積みあげた跡が判別できぬ程に風化してしまっている。近くを運河が流れている。往古は揚子江であった所であろう。

六月二日。雨。午前七時一九分発の列車で蘇州へ向う。一時に宿舎蘇州飯店に着き、昼食後、虎丘雲巖寺・寒山寺・留園・玄妙観と廻って、双塔を一瞥した後、再び宿舎に戻った。この間ずっとひどい雨である。雲巖寺の斜塔は美事なものであったが、大粒の雨が顔にあたるために、近寄ってまともに見あげることができなかった。寒山寺は唐・張繼の楓橋夜泊の詩で世上有名であるが、さしたる感慨も興らぬ所である。かえって近くのクリークでものを洗う老人の姿に、今の中国の人々の生活が感じられる。留園は、蘇州の庭園の中でも最も名あるものの一つということで、ガイド氏のままに一応の見学を済

ませた。とは言うものの、順繰りに所謂名所を案内されるだけで、聊か物足らなさを覚えてもいた。雨に降りこめられたせいもあつたろうと思う。そうした折に玄妙観という初めての大道観を目にする機会を得た。これまでも、道観らしき建物が他の用に供されている所には行ったことがあつた。しかし、これ程の壮大と言つてよい本格的な建造物は初めてであつた。中心となる三清殿は、周囲を太い石柱で支えられ、それぞれに天尊名が刻んである。正面のものは全て削り取られており判読できないが、裏に回ると、『護国永安天尊』『隋方証果天尊』などの字が読み取れる。他の建物では、雷祖（尊？）殿と楼門だけが残っている。三清殿、雷祖殿ともに物置きのようになっている。三清殿内には入れなかつた。また三清殿の裏には立派な石碑が建てられているが、碑面は完全に磨滅されている。境内の左右には、破壊されたものらしい大きな石が、所定の位置であつたろう所にそれぞれ転つており、全体の区画も残された石造の欄干によつて窺うことができる。

楼門の隣りが友誼商店になっている。玄妙観全体が裏通りに位置するようになってしまつており、雨が降つていたせいもあるが、三清殿の石柱の下などには獣の毛らしきものが落ちていたりして、何となく暗く締めじめした雰囲気がある。戦前の旅行記録には、この道観の賑いぶりが必ずと言つてよい程紹介されているが、今は全くさびれてしまつている。

この玄妙観は、『蘇州府志』を見ると、円妙観となつている。卷四・道観の項の冒頭に記録され、創建は、西晉の咸寧中とあ

る。現在の建物は、所載の「重修円妙観三清殿記」によれば、清・仁宗の嘉慶二年（一八一七）、雷火によつて三清殿が破壊された後、翌二三年より二四年（一八一九）にかけて修復されたものである。その時、山門も併せて復旧されている。また円妙観の名は、元代から始つたもので、唐代には開元宮、北宋代には天慶観と呼ばれた。

夜、就寝の頃、それまで気づかなかつた蛙の鳴き声が聞えて来た。耳を澄ますと、遠く運河を通るらしい船の汽笛も聞えて来る。近代的ホテルの中でこのような経験をしよつとは想像もしていなかつたので、聊か驚くと同時に、不思議に気持ちの休まる思いがした。

六月一三日。蘇州での二日目。朝起きるとすぐにホテルの最上階に行き、眺望の良い所を捜して、朝靄にかすむ蘇州の景観を思う存分楽しんだ。一面に広がる水田の緑一色の中に、運河とそこに架かる石橋とが、ほのかに白く浮き出て見える。目を転じると、昨日通りから窺い見た双塔も、霧の中に白く淡く、まるで影絵を見ているように浮んでいた。

朝食後、網師園・北寺塔とまわり、午前一〇時二五分発の列車で上海に向う。北寺とは俗称で、正しくは報恩講寺と言う（蘇州府志卷四〇）。塔に登ると、寺門より南に向つてまっすぐに道路が延びている。伽藍の一部は周りに木組みをして修理を行っているようだ。塔基壇の周囲は市民の憩いの場であるらしく、椅子と卓とが置いてあり、人々が茶をすすりながら歓談していた。

昼前には上海での宿舎に到着し、昼食後、希望者だけで龍華寺に向つた。途中、車の渋滞に出会い、止むなく徒歩となつたが、この龍華寺も、この時修復中であつたため中には入れず、門外より窺い見るに終つた。工事は来年にも完了する予定とのこと。道路をはさんで立つ塔は、八角七層の木造で、優美である。石造の、荘大だが反面武張つた感のある塔を見慣れた目には、如何にもほっそりと優しげに見える。

この後、新華書店・朶雲軒・古籍出版社等を訪れ、買物も済ませ、夜は雑技を楽しむなどして、二週間の最後の夜が過ぎて行つた。雑技の観客には西洋人が多く、彼等の靴など皆一様に真新しい程に輝いていたが、それに較べ、我々団員のものは大概泥だらけで、今回の旅の性格を物語っているようだった。

六月一四日。曇。この日も五時半起床・六時朝食・六時半出發予定と、最後の最後まで強行軍であつた。余りに早かつたからかどうか、ホテル側の朝食の準備がまだ整つていなかった程である。

九時少し前に上海空港を離陸。二週間前に進入して来たのと同じコースを逆に飛ぶ。広大な水田地帯・光る池や沼、長大な海岸線を眼下に眺めつつ海上に出た後は、やはり来た時と同様の短かさで、一時には大阪空港に着いてしまった。

既にこの「行記」(下)が上梓されるまでには、同行の他の団員によって、幾つかの旅行記録が公けにされている。同じような感想になるかも知れないが、やはり特筆に値いするのは、

佛教寺院の修復工事の迅速さであろう。勿論、しばしば説明を受けた文革中の破壊といったものが、どの程度のものであったのか確認する術を持たぬ以上、比較の仕様もない事柄であるかも知れない。しかしそれでもなお、その美事に修復された伽藍は、見る者に偉容をもって迫つて来る。と同時に打ち棄てるに任せられていくものも数多いことが思われる。修復され器が与えられた佛教は、今後どのようにその姿を変えて行くのだろうか。それ以上に果して変えることによつて後世に継承されて行き得るのだろうか。他面、荒廃し朽ちてしまひ、また朽ちつつある寺院が存在することを思うと、こうした問題には軽忽には答えが出せないという思いのみ強く残る。ともあれ、国清寺や天童寺、また棲霞寺等は立派に後世に伝えられようとしている。この事実もまた素直に受け止めるべきであろう。

(大内記)

雑 感

帰路、上海を飛び立つて伊丹に到着する間に、実に不思議な感覚にとらわれていた。それは時差が僅かに一時間というのに、時の流れを全く異にした空間をさまよい、今やと現実と呼びもどされたかのような錯覚であつた。刻々と流れる山間のせせらぎを見ながら育ち、海かともごう悠久たる長江の流れに、ただ茫然と半月をすごした自分の姿をそこに見たのである。江南の東西をめまぐるしく走りまわり、可能なかぎりの調査記録を

とって歩く旅行団一行の後を、詳細なメモはすべて大内氏にお願いして、ただついて歩きじつと立ちずくみして、そここの空気を五官のすべてに吸い込ませたく、佇むのみであった。その中で感じた事項の二三を記してみたい。

廬山は、慧遠が名士百二十三人と共に白蓮社を結社し、念佛行に励んだといわれる中国浄土教発祥の地であり、かねてよりぜひ訪れたいと願っていた処である。南昌より九江に向ってバスが一路北上し、田園地帯を過ぎて延々と続く赤土の高原を越える先に、山が見えてきた。廬山はかなり高い山と聞いているが、その東林寺はどのあたりにあるのだろうか、何となくその中腹より下のあたりであろうか、などと思いつぐしながら進むにつれて、やがて西林寺の塔が見えてきた。どうも「廬山の慧遠」という言葉に引きづられて勝手に画いていた情景とは思ってもよらず、廬山の高峰に相對してある崗を背にして、峯々に向いあって南面した位置に、小ぢんまりと東林寺は建っていた。寺の西側の小高い処にある慧遠の墓塔からは廬山の山脈が一望にして眺められた。背にした崗の西側を周って道路は北上して九江市に通じ、長江へと出ることができ。東側の小路を経ても同じくそこへ通じている。当時知名の人々が慧遠の元へ往き来し、百二十余名もの人々によって結社されたということと、東林寺の建っている位置を見て、今迄に勝手に想像した映像が壊されると同時に、ほんとと安堵するのを覚えた。もともと常盤博士は「予は今猶ほ慧遠最初の居住、白蓮社発祥の地を以て、山頂と思ふ考を放棄する事が出来ぬ」(支那佛教史蹟踏査記・

一四三頁)と記しておられる。そのような時期のあつても勿論よいようにも思われるが、私はむしろ慧遠の師道安の「今、凶年に遭い、國主に依らずんば法事立ち難し。又、教化の体、宜しく広布せしむべし」と議したと伝えられる(出三蔵記集卷第十五・道安法師伝第二)ことに、北地と江南の大きな環境の相違はあるといえども、やはり引かれる思いがするのである。ともかくも五老峯登山は、常盤博士が雨天を嘆かれた時とは異って、晴天に恵まれ素晴らしい景観であった。帰途は廬山の東側を回る道であり香炉峯とその滝を遠望し得た。望廬山瀑布の詩、「西登香爐峰、南見瀑布水」は李白が香爐峯に登ったのではなくて、下から眺めて吟じたのだなあ、などと思いつけりながら南昌へと向った。

杭州より紹興を経て曹娥江にそって南下、天台山国清寺へと向う。南船北馬といわれるが、成程水路の便は良いようである。「譬えば水路の乗船は則ち楽なるが如し」という論註の文は、北地より江南を訪れた曇鸞の実感であったのかもしれない。智顛はもとより彼を慕って天台山に登った人々も、曹娥江や曹娥から紹興・杭州へと通ずる水路を利用したものであろう。今は杭州から臨海へ通ずる広い道路を、麦の脱穀も手伝いながらひた走りに走った。城関鎮という町からちよつと離れた山間の深山幽谷に国清寺は南面して建っていた。

今回の旅程が殊にそうであったのかもしれないが、町の中の寺院は別として、山間に在るものほとんどが、町や邑から少し奥まった谷間の深山幽谷の状をなしている場所に、南面して

れば、現在のような大きな規模の寺院になったとしても不思議ではなからう。とすれば梁代の止観寺は、現在の棲霞寺よりも少し奥まった所にもう少し小規模に、南面して建てていたのではないであろうか。こちら辺も散策してみたいものである。

このような雑感を幾つか挙げることはできても、既に大内氏によって詳細な報告がなされていて、これに付け加えるなものもない。所詮は蛇足に過ぎないことを了知しているつもりである。やはりここで再度、調査旅行団の無理な要求を受け入れて、無事に行程をこなして下さった中国国際旅行社に甚深の謝意を述べたい。そして団長の鎌田東大教授をはじめ、お世話をいただいた諸氏に深くお礼を申し上げるものである。

(三桐記)

附記

「行記」末尾にも書いておいたが、これまでに同行の他の団員によって幾つかの旅行記録が公けにされているので、この紙面をかりて紹介しておきたい。

「廬山紀遊」 土田健次郎 中国古典研究第二五号 昭和五

五年一〇月 所収

「訪中記」 駒沢大学佛教学部論集第一二号 昭和五五年一

一月 所収

右には、池田魯參「廬山・天台山巡礼行」、石井修道「中国禅宗の発生地と発展地を巡りて」、伊藤隆寿「南京・蘇州・上海の文化史蹟」の三編を収めている。

「中国江南諸刹名山歴訪記」 末木文美士 佛教文化（東京

大学佛教青年会 刊）第一〇巻 昭和五五年一二月 所収